

●名言・名作に学ぶ生き方シリーズ 8

名詩に学ぶ

生き方

《西洋編》

●荒井 冽著



●著者紹介—————荒井 洌（あらい・きよし）

1939 年 福島県郡山市生まれ

現 在 白鷗女子短期大学教授

著 書 『新世代の保育をデザインする』筑摩書房

『育児と保育のあいだ』川島書店

『愛される保育園生活をつくるために』

ひかりのくに

『保育を学ぶ若い人たちへ』家政教育社

『四季おりおりの保育』明治図書

など

名詩に学ぶ生き方(西洋編) 1990 年 3 月25日 初版発行

●著 者 荒井 洌

●発行者 山浦真一

●発行所 株式会社 あすなろ書房

〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町 551

電話番号 03-203-3350

●印刷所 壮光舎印刷

●製本所 ナショナル製本

© Kiyoshi Arai 1990 ISBN4-7515-1388-5/NDC 150

80 p/23 cm

落丁・乱丁本は送料小社負担にておとり替えます。

●名言・名作に学ぶ生き方シリーズ

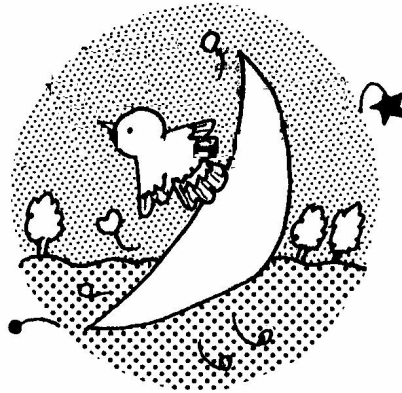
名詩に学ぶ

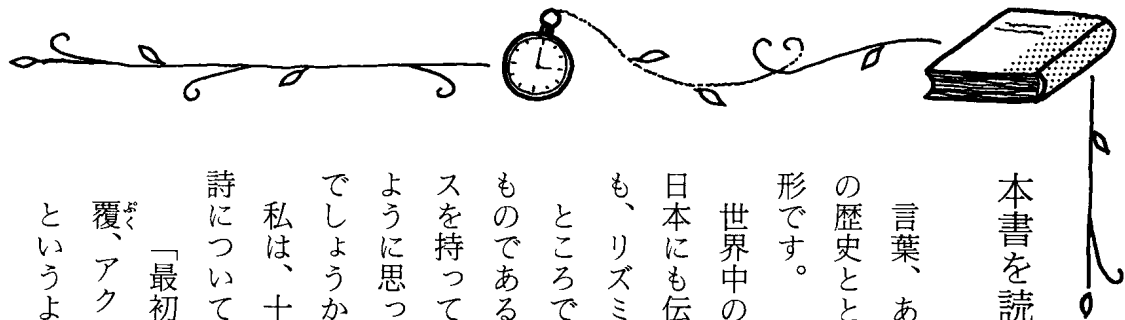
生き方

《西洋編》

●荒井 冽著

江苏工业学院图书馆
藏书章





本書を読むみなさんへ

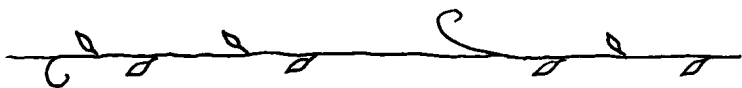
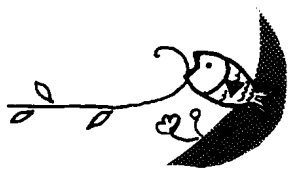
言葉、あるいは文字で描きだす芸術に、詩うたというものがあります。人間の歴史とともに、ずっとずっと昔むかしからあった、一つの、美しい、心の表現の形です。

世界中の人びとは、それぞれにいろいろなスタイルの詩を持っています。日本にも伝統的な形式にそったものや、自由な形のものもあります。西洋にも、リズムミカルな韻いんを踏ふんだものなどがあります。

ところで、詩うたなどというと、私たち一般の者からは、なにか遠い存在そんざいのものであるかのように感じられるのがふつうです。そして、特別の力とセンスを持っている人たちだけが、作り、口ずさみ、味わうことができるもののように思ってしまう。しかし、詩うたとは、はたしてそのようなものなのでしょうか。

私は、十八世紀のフランスの思想家であるジャン・ジャック・ルソーの、詩についてのつぎのような考え方に、とても魅力みりょくを感じます。

「最初の話し言葉は最初の歌だった。リズムの周期的で拍子ひょうしのついた反覆はんぷく、アクセントの旋律せんりつ的な抑揚よくようは、言語とともに詩と音楽とを生み出した。というよりはむしろそれらすべてが、その幸福な風土と幸福な時代には、



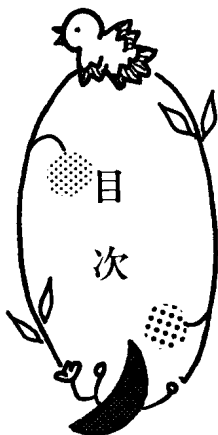
言語そのものにすぎなかった……」（現代思潮社『言語起源論』）

つまり、人びとが最初に口にした話し言葉というものは、リズムとアクセントをともなった、相手への思いが込められた「詩」そのものだったということなのです。ですから、「詩」とは、本来すべての人びとの素朴な心の表現形態であつたのだと言つてよいでしょう。すなわち、すべての人びとの共有財産だったのです。

本書には、二十一の西洋の詩を取り上げてみました。できるだけユニークで、心が引かれるタイトルと内容のものを選んだつもりです。

ふだん、「詩」とはあまり縁のない方に、むしろこの本は手に取っていただけることを願っています。そして、読んだ後で、「詩」とは案外おもしろいのだなあと感じていただけたら、私としては「やったあ！」ということになるのです。

荒井 冽



本書を読むみなさんへ

..... 2

「夕星^{ゆうぼつ}は」 サッポロ／呉 茂一訳

..... 8

「学生時代」 ダス／林 稷二訳

..... 10

「慰めは涙^{なみだ}の中に」 ゲーテ／高橋健二訳

..... 14

「早春の歌」 ワーズワース／田部重治訳

..... 18

「ひばりに寄せて」 シェリー／上田和夫訳

..... 22

「わが母上に」 ハイネ／片山敏彦訳

..... 26

「冬の朝」 プーシキン／金子幸彦訳

..... 28

「旅することは生きること」 アンデルセン／山室 静訳

..... 32

「人生の讃歌^{さんか}」 ロングフェロー／大和資雄訳

..... 36

「農夫の歌」 コリツォーフ／大沼裕子訳

..... 40

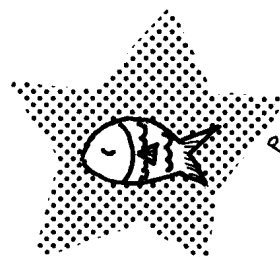
「こんにちわ世界君」 ホイットマン／杉木 喬・

鍋島能弘・酒本雅之訳

..... 44

「時間厳守^{げんしゅ}」 ルイス・キャロル／高橋康也・沢崎順之助訳

..... 50



「僕は思ったー」ビョルンソン／山室 静訳	54
「のぞき見る子どもたち」ランボー／堀口大學訳	57
「不可能」ヴェルハーレン／渡辺一民訳	61
「ひわ」デーメル／井上正蔵訳	65
「山のあなた」カール・ブッセ／上田 敏訳	68
「子供」「幼年時代」リルケ／富士川英郎訳	70
「書物」「春」ヘッセ／高橋健二訳	74

本文さし絵・倉橋三郎／本文カット・北山葉子



夕星^{ゆうづつ}は

夕星^{ゆうづつ}は、

かがやく朝が 八方に散らしたものを
みなもとへ 連れかえす。

羊^{ひつじ}をかえし、

山羊^{やぎ}をかえし、幼^{おき}な子を また母の
手に連れかえす。

呉^{サツ}
茂^{ポー}
一^一
訳

Sapphō

前612ごろ～？ ギリシャ

サッポーというギリシャの人を名を聞いたことはありませんか？ 古代のギリシャで、
“詩人”といえはホメロスのことを言い、“女流詩人”といえはサッポーのことで、詩女
神としてたたえられました。

彼女かのじよは紀元前六世紀ころに活躍かつやくした人で、ギリシャのアテネの東側の海、エーゲ海に
浮かぶレスポス島で生まれました。そして、彼女かのじよの詩は、この島の日常語、いうならば
当時のギリシャにあつては一地方ほうげんの方言で、とてもわかりやすく書かれたといえます。

この詩に出てくる日本語の訳語である「夕星ゆうづつ」は、宵よいの明星みょうじょう、すなわち金星きんせいのことを
指した古い言葉です。沈しずんでいく夕日いづに続いて、ほどなく西の空に輝かがやいて見えてくる星
なので、「夕日につづきて出る」ということから、この言葉が生まれました。つづくのう
ちの濁音だくおんが前に出て、夕づつとなりました。

しかし、すてきな表現ですね。朝の太陽かがやの輝かがやきが、すべてのものを四方八方に散らし、
夕方ともなると、宵よいの明星みょうじょうがすべてのものを再びもとに連れもどすというのです。

「羊ひつじをかえし、山羊やぎをかえし」とありますから、当時の人びとの生活には、羊や山羊は
いなくてはならない動物だったのでしょう。最後の、「幼おさな子を また母の手に連れかえ
す」は、遠いギリシャの昔むかしも、今の私たちの暮くらしも同じですね。

昇のぼる太陽とともに大人おとなは働きに出て、幼おさな子は遊びに出る。そして宵よいの明星みょうじょうのきらめ
きとともに、みんながもどってくる。一日の暮くらしのリズムというものを、サッポーは
こんなにも美しく描えがきました。

学生時代

財布はいつも空っぽで、

頭は心配事で一杯。

あの時分の一シリングは、

一ダレルの価値があつた。

背にはマントをひっかけ、

足でボロ靴を引きずり、

引越しも自分でしたものだ。

綺麗な本がならんでいる

店の主人が僕にこたえた

「金さえ持ってくれば、本を渡すよ」

林ダス
穰二訳

という言葉がどうしても忘れられない。
僕^{ぼく}にしても、ゴツツにしても、アルフにしても、
亡^なくなったお父さんから
学資^{のこ}を遺^{のこ}してもらってなどいなかった。

Petter Dass
1647~1708年 ノルウエー

おもしろい詩があるものです。私などには、もう、うれしくなってしまうほどに愉快な詩です。

作者のダスという人は、少々古い時代の人物です。十七世紀の後半から十八世紀の初めのころにかけて活躍した北欧のノルウェーの詩人であり、また牧師でもありました。つまり、現代の日本からすれば、はるかな時代の、はるかな地の人ということになります。ところが、この「学生時代」という詩は、現在でもちよつと年輩の人が読めば、みな我がごとのように自分の青春時代をなつかしく思い出すような、温かな、親しみのある雰囲気を持っています。

時代は、今から三百年ほど昔のことです。当時、ヨーロッパの世界で学問とか文学とかいえば、ラテン語系統のものが重んじられていましたし、ノルウェーあたりでは、この他にドイツ語系統のものが尊重されていたようです。しかし、彼は漁村などで働く一般庶民の生活の姿や、自分の国の自然を、美しく、明るくたいあげたのでした。また、彼は牧師であつたということもあり、彼の作つた聖歌は、今でもノルウェーの人びとに愛唱されているということです。

ところで、この詩は貧乏な学生時代、お金がなくて勉強する本も買えなかつた思い出をうたっているわけですが、本当に身につく勉強というものは、どうしてもあの本が欲しいというような、心のエネルギーがなければだめなような気がします。図書館で借りたり、苦勞に苦勞を重ねなければ、簡単に抜け出て行ってしまうように思うのです。



慰めは涙の中に

みんなが楽しそうにしているのに、
なぜ君は悲しんでいるのか。
君の目を見ればわかる、
ほんとに君は泣いたのだね。

「ぼくがひとりで泣いたとて、
それはぼくだけの苦しみだ。
泣けば流れる甘い涙に
ぼくの心は軽くなるのさ」

ゲーテ
高橋 健二訳

楽しいな友だちが君を招いている。

さあ、ぼくたちの胸むねに来て、

なくしたものはなんなりと

心おきなく打明けたまえ。

「にぎやかに騒さわいでいる君たちに

哀あはれなぼくの苦しい心はわからない。

いやいや、ぼくは何もなくしはしない。

切ない思いは数々あるが」

それなら直すぐに元気を出したまえ。

若い血潮ちしおの君なのだ。

君の年なら、力もあるし、

望みをかなえる勇氣もあろう。

「いやいや、望みをかなえる道はない。